名大文学部でどう学ぶか？

－文学部２０２０年度新入学生ガイダンス資料－

Ⅰ　人文学の教育と研究の場としての文学部

１．名古屋大学文学部とは？

２．そして人文学に出会う

Ⅱ　文学部での学修　―全学教育科目と専門教育科目―

１．学修に積極的に取り組む

２．４年一貫教育体制のもとで学修する

３．進級要件

４．専門科目の履修

（１）文学部専門科目の特色

（２）文学部専門科目の履修単位

５．国際化へ向けて　－　留学のすすめ　―

Ⅲ　分野・専門を決め、卒業論文を仕上げる

１．分野・専門の研究室がベースキャンプ

２．分野・専門の特色を知る

３．各分野・専門から

Ⅳ　円滑な大学生活に役立つ情報を得る

１．掲示板・ホームページを必ず確認する

２．指導教員に相談する

３．文系教務課と連絡を取る

４．学生相談総合センターを訪れる

付　文学部規程別表　注釈

名古屋大学文学部

２０２０年４月

Ⅰ　人文学の教育と研究の場としての文学部

1. 名古屋大学文学部とは？

文学部の教育目的

人間への洞察力と言葉への関心をもち，心と行為を考える人文学に論理的思考力をもってアプローチする意欲のある人材を育成します。

文学部の教育目標

「人間への洞察力」　「言葉への深い関心」　「心と行為に対する探究心」

そもそも「文学部」というのは、人間の知性や感性の本質を明らかにすることを目的とする「人文学」（ヒューマニティーズ）の個別的学問分野の集合体でなりたっている。人文学の性格は多様で、哲学、歴史学、文学のような伝統的な分野や、心理学、社会学、地理学などの環境や行動科学的な分野まで広がっている。この広がりは人間の精神的営為の歴史的広がりでもある。

人間自身と人間がつくりあげた文化を知りたいという行為は古代から絶えずつづけられてきた。しかし、高度な技術革新やグローバル化現象によって、人間の内的外的環境に急激な変化が起きているこの２１世紀の今、われわれは生命、社会、歴史など人間にかかわる諸問題に対して確かな認識を獲得し、新たな視点を探求することが求められている。高度の技術にささえられた２１世紀の文明社会のありうべき姿を自己検証的に達成するためには、人文学的アプローチによる人間洞察を欠かすことはできない。したがって、文学部とは人間性のさまざまなありようを検証し、より豊かな人間の営為に向けて知的活動を展開する場であるといえる。

われわれの文学部は、日本有数の基幹総合大学の一つである名古屋大学の一翼を担いながら、人間性についての新たな創見をひきだし、人文学の教育・研究において国際的にも先端的な活躍をしているユニークな学部である。また、名古屋大学文学部は、次ページの表のような、三つの学位プログラム、四つのコースと２１の分野・専門から構成されている。まずはこの２１の分野・専門の中からこれと思うドアを敲いてみよう。自ら求めれば、豊穣なる知の世界が開けよう。

学位プログラム	コ ー ス	分　野　・　専　門
言 語 文 化 系	文 芸 言 語 学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、 ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学（第1・第2）、 中国語中国文学
	哲 学 倫 理 学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴 史 文 化 系	歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、 文化人類学
環境行動学系	環 境 行 動 学	社会学、心理学、地理学

＊この他、人文学研究科には以下の分野・専門、コースがある。
日本語教育学、英語教育学、応用日本語学、映像学、日本文化学、文化動態学、
ジェンダー学、英語高度専門職業人コース、国際・地域共生促進コース

2. そして人文学に出会う

第 1 年次に専門基礎科目として開設される「人文学入門」が、人文学との出会いの機会となる。この授業は、人文学の全体を見渡すことをめざした、1 年生向けのリレー講義である。

人文学入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは、「文芸言語学コース」「哲学倫理学コース」「歴史学・人類学コース」「環境行動学コース」のそれぞれに共通な特徴や各分野・専門の固有の特色について、基礎的な概説を行うものである。1 年次の秋学期に行われる分野・専門分属志望調査にそなえて、これらの中から複数の講義を受講することが望ましい。

なお、全学教育科目として開設される種々の科目区分の中にも人文学に関連のある授業が少なくないので、『シラバス』(全学教育科目授業要覧)をよく読み、各自の関心に合う授業を履修するとよい。

Ⅱ　文学部での学修　ー全学教育科目と専門教育科目ー

1.　学修に積極的に取り組む

自分はなぜ文学部を選んだのか？　どんな問題に関心を持って学修しようとしているのか？少々オーバーな夢もいい。自分に対する合理化であってもよい。そういう問いを自分に投げかけ、その答えを意識化したり言語化したりしてみよう。自然にその気になってくるものだ。

ただ漫然と授業があるから出席するとか、履修要件に従って単位を取るというのでは、受け身の態度に凝り固まってしまいかねない。今この時期に学修への自主的な構えを形成することが大切である。

2.　4年一貫教育体制のもとで学修する

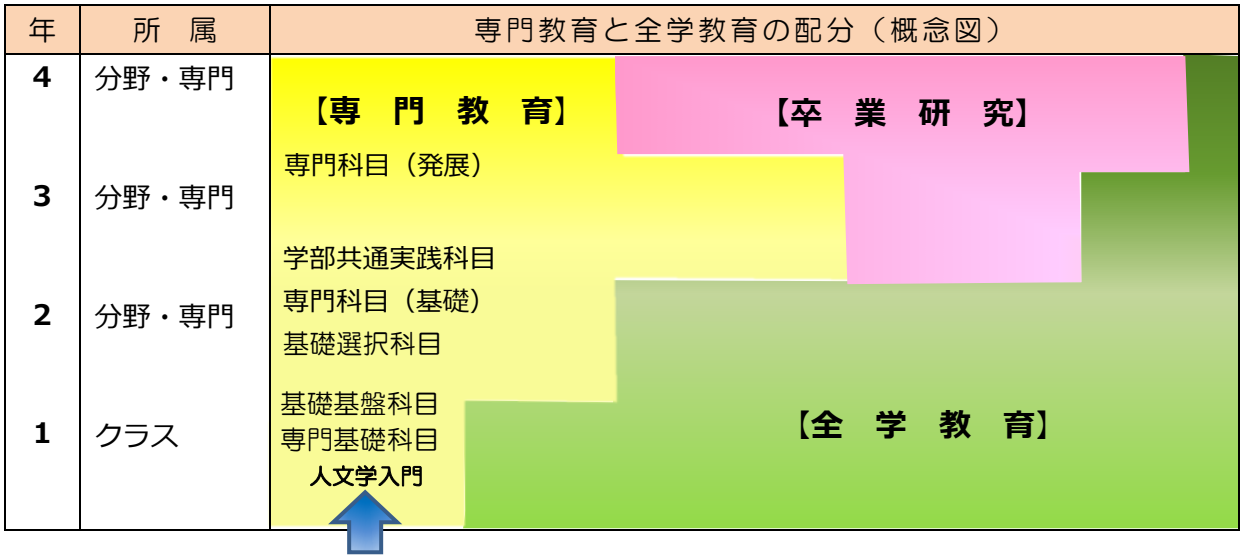
従来は自分の分野・専門が決まるまでの２年間、一般教育（教養教育)科目を中心に履修し、後半２年間がもっぱら専門教育科目を履修するというように区分されていたが、本学では平成６年度から「４年一貫教育」が実施され、全学教育科目と専門科目(各学部で開設）とを年次進行的に楔（くさび）型に組み込み、両者を有機的に結びつけた一貫教育を受けることができるようになった。

すなわち、**第１年次** には、**全学教育科目**（全学基礎科目・文系基礎科目・理系基礎科目・文系教養科目・理系教養科目・全学教養科目・開放科目）のほかに、専門科目として春学期に**専門基礎科目**の「人文学入門」、秋学期に**基礎基盤科目**の「日本文化事情」「異文化理解」が開講される。

第２年次 の専門科目としては、**基礎基盤科目**の「人間と倫理」の他、様々な分野・専門の概論や**基礎選択科目**が開講され、また各分野・専門の**基礎的な専門科目**も受講していくことが可能となる。また、ここまで学んできた人文学の知識や方法論を実社会で具体的にどう活用していけば良いのかを学ぶ、**学部共通実践科目**が開講される（「人文学の学生のための情報リテラシー」は必修科目である）。なお、第２年次からは、それぞれ分野・専門に所属することになるので、履修計画を立てる際には、所属する分野・専門の指導教員の指導や助言を得ることができる。

第３年次･4 年次 には、**発展的な専門科目**の履修が中心となり、特に第４年次には**卒業論文**の作成が中心の生活になる。それまでに履修した専門科目の内容を踏まえ、各自で課題を設定し、その研究成果を卒業論文にまとめなければならない。論文完成までの過程で高められた問題解決の力量は、卒業後の進路の違いを超えて貴重な財産となるはずであり、名大文学部の教育において最も重視している点である。

次ページの図に、学修上の重点の配分を概念的に示す。ただし、これはかならずしも履修単位の配分には対応していない。



3. 進級要件

文学部では、第３年次への進級にあたって、一定の要件を設けている。詳しくは、「文学部規程」の第４条及び別表１に記されているが、主として全学教育科目がきちんと修得されているかを判定するものである。

科目区分			卒業に必要な単位数	３年次進級に必要な単位数
全学基礎科目	基礎セミナー	基礎セミナーA	2	**2**
		基礎セミナーB	2	**2**
	言語文化	英語	8	**8**
		英語以外の外国語	１０	**１０**
		日本語（留学生のみ）	（１０）	**（１０）**
	健康・スポーツ科学	講義	2	**2**
		実習	2	**2**
	小計		２６	**２６**
文系基礎科目			8	**１０**
理系基礎科目			4	
文系教養科目			4	**6**
理系教養科目			4	
全学教養科目			2	
専門基礎科目		人文学入門	2	**2**

なお、言語文化科目２単位以下不足の者に限り、「仮進級」として３年次への進級が認められる。

4. 専門科目の履修

（1）文学部専門科目の特色

文学部の専門科目の特色としては、次の７点が挙げられる。

特色①：人文学の基礎を身につける**専門基礎科目**

人文学の全体像を把握し、人文学の基礎を修得するための「人文学入門」をそれぞれのコースごとに開講する。

特色②：現代社会の諸問題と向き合うための**基礎基盤科目**

どの分野・専門に進むかに関わらず、文学部に学ぶ全ての学生に、現代社会が直面する諸問題に人文学がどのように応えていけるのかを考えるために、「日本文化事情」、「異文化理解」、「人間と倫理」を開講する。

特色③：分野・専門に共通する諸課題を学ぶ**基礎選択科目**

コースや学位プログラムに共通する諸課題を学ぶことによって、より大局的、俯瞰的な視野を身につけ、専門科目の学習への橋渡しをすることを目的として、「史学概論」「環境行動学基礎」などの入門・概論の科目、また「ラテン語」「ギリシア語」などを開講する。

特色④：社会との交流・相互作用を重視した**学部共通実践科目**

人文学について学んだ知識や方法論を実社会で具体的にどう活用していけばよいかを学ぶために、「人文学の学生のための情報リテラシー」（必修）、「生涯学習概論」、「博物館概論」を開講する。

特色⑤：広い視野を獲得できる**多面的な履修**

選択科目において、広く他分野・専門の科目を履修することで、創発的・多面的な学びを促進し、進取的精神を涵養することを目指す。

特色⑥：学生ひとりひとりの個性を伸ばす**少人数教育**

平成 29 年度に大学院人文学研究科が設置されたことにより、これまでのほぼ倍の教員が文学部の教育に携わることとなり、いままで以上にきめ細やかな少人数教育が可能となった。

特色⑦：**国際的な視野**を身につける教育環境

文学部及び大学院人文学研究科には多くの留学生が在籍している。各分野・専門において、留学生と一緒に学ぶことで、より広い視野を身につけることができる。また、英語だけで授業を行う G30「アジアの中の日本文化」プログラムの科目を受講することも可能である。

（２）文学部専門科目の履修単位

専門基礎科目・専門科目として履修する科目は、下記の**８４単位**となる。
（「文学部規程」第６条及び別表３、４、７参照）

特色①	専門基礎科目・人文学入門		**2** 単位
特色②	基礎基盤科目	選択必修	**2** 単位
特色③	基礎選択科目	選択必修	**2** 単位
特色④	学部共通実践科目		**1** 単位
	各分野で指定する専門科目		**３２**単位
特色⑤	選択科目		**３５**単位
	＊他分野の専門科目、基礎基盤科目・基礎選択科目・学部共通実践科目を８単位以上含む		
	卒業論文		**１０**単位

特色⑤に示したように、選択科目３５単位をどのように修得するかは、各自の判断に委ねられている。自分の分野・専門で開講されている科目を中心に、専門分野を深く学修するのも良いだろう。あるいは、自分の所属するコースの科目を色々と学修してみるのも良い。さらには、他のコースを含め、広範囲にわたる人文学の様々な講義を学修していくことも可能である。このように、文学部では、各自の学修目的に応じて多様な学修計画を作成し、それにもとづく専門教育を受けることができる。具体的な履修計画を立てるにあたっては、クラスの担任教員や所属する分野・専門の指導教員に積極的に相談してほしい。

5. 国際化へ向けて ― 留学のすすめ ―

学生時代に海外で勉強した経験は、貴重な財産になる。様々な留学プログラムが利用できるので、是非積極的にチャレンジしてほしい。国際教育交流センター海外留学室では、留学へのサポートを行っている。（http://ieec.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/abroad/）

また、文学部では、平成 26 年から、英語で行われる授業だけを履修することで学位が取得できる教育プログラム G30 「アジアの中の日本文化」プログラムを開設している。「文学部専門科目の特色⑦」に記したように、一般学生もこのプログラムの授業を受講することができるので（もちろん、授業についていくだけの英語力は必要である）、希望者は、G30 の担当教員に相談してほしい。

Ⅲ　分野・専門を決め、卒業論文を仕上げる

1. 分野・専門の研究室がベースキャンプ

文学部の特徴は、分野・専門に所属して、その研究室で学問的営みの実態にふれながら、自分の問題意識を卒業論文に結実させていくという作業にある。

１年次の秋学期に分野・専門を決め、それに従って研究室に籍をおくことになる。そこが各自のベースキャンプである。そこで各自の関心にもとづいて研究課題を設定し、資料を集め解析して、その成果を卒業論文にまとめるのだが、その過程で、課題追求の厳しさと面白さを味わうことができるはずである。卒業後の進路の違いを超えて、自分の専門をもつということは、自力で人文学的問題を処理する力量を高める上に貴重な経験として、当学部出身者に対する評価のポイントになっている。さまざまな分野でその力量を高く評価されているのも、その伝統に負うところが大きい。

2. 分野・専門の特色を知る

入学から分野・専門決定までの期間が短く、しかも、人文学個別学問分野の入門的授業が多いわけではない。そのため自分が所属する分野・専門の決定にあたって戸惑うこともあろう。

そこで、次に当学部の「分野・専門（研究室）紹介」を掲げることにした。もとよりこれで十分ではない。クラス担任教員や教務課に相談したり、気軽に「研究室訪問」をしたりして、高校時代に思い描いていたのとは違う文学部の実像にふれ、自分の問題関心に合う分野・専門を決めるようにしてほしい。

3. 各分野・専門から

◇◆◇　言語文化系学位プログラム　◇◆◇

文芸言語学コース
言　　語　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

言語学は言語を研究対象とする学問である。世界中で話されている言語の総数は 7000 ほどとも言われていて、言語自体がきわめて多様な存在である上、人間の活動に様々に関わっているため、言語学の研究分野は非常に幅が広く、哲学、論理学、心理学、社会学、地理学、人類学あるいは物理学、情報工学など数多くの学問分野と接点をもっている。本分野・専門では、そのような学際性を備えた言語学の研究分野の中で、言語事実の詳細な観察・記述に基づいて言語理論の確立を目指すというオーソドックスな研究分野に最も重点を置いている。

2）教育の方針

学部専門教育の目標は、言語のどの分野を研究するにしても必ず知っていなければならない、言語学の基礎的な方法論とその具体的な展開の仕方を身につけることにある。

個別言語については、なるべく多くの言語に関心を持ち、そのうちいくつかを選択し自主的に学習することが望ましい。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

言語学を志す者は、言語学を取り巻く様々な学問領域まで見渡すことのできる広い視野をもっていなければならない。幅広い関心をもって、関連する科目をできる限り多く履修することが望ましい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

言語学を志す者は、できる限り多くの言語に関心をもち、学習することが望ましい。初修外国語については特に制限はないが、真摯に学習することが望まれる。中でも、英語については、今後言語学を学んでいく上で最も重要な外国語であるので、十分な力を身につけておくことが肝要である。

なお、卒業には、専門科目として、英語・ドイツ語・フランス語以外の外国語２単位の履修が必要である。

文芸言語学コース
日　　本　　語　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

日本語学は、平安時代末に発足した日本古典学に起源をもち、以来８００年の伝統を重ねている。その間、近世の国学の成立によって中世の貴族的な学問から庶民的な学問へと変貌を遂げ、

明治以後は西洋の学問の流入に伴う近代科学としての国語学の確立へと展開してきた。日本語学研究室は、古典学的教養に立脚しつつ最新の言語理論にも配慮した広い視野に立って研究・教育を実践している。

2）教育の方針

学部専門教育は、堅実な基礎知識によりつつ、日本語に関するあらゆる現象についての鋭い問題設定能力の養成を目指している。特に演習は、学生による主体的な取り組みとともに、多量の情報を適切に処理する能力が求められ、卒業論文の課題設定の拠り所にしてほしい。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

隣接分野である言語学、また文学・歴史学（なかでも日本文学・日本史学）、文化研究など、関連分野の科目を広く受講することが望ましい。
科学論や論理的思考にかかわる分野にも関心を持ちたい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

特に条件をつけないが言語を対象とする学問であるので、履修外国語については自覚的な取り組みでのぞむことが求められる。

文芸言語学コース
日　本　文　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

古代から現代に至るまでの「日本文学」作品を研究の対象としている。「文学」の範疇そのものが拡大し、またメディアの発達による各種媒体の登場に伴い、研究内容も方法も多様化しつつある。その中にあって、注釈的研究を軸とした伝統的な研究方法を重んじている。

2）教育の方針

学部専門教育では研究基礎能力の育成に重点を置く。研究対象を自己との関わりにおいて、どのように把握するかを研究の原点に据えつつ、その把握が、客観的な裏付けを以ていかに他者を説得できるかという側面をも重視する。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

いわゆる「国文学研究」から「日本文学研究」へという名称の変更が示すように、「世界文学研究」と共通の新しい研究方法と手段に対応できる能力が要求される。そのためには、例えば外国語や自然科学系科目が不得意だからというような消去法的な選択をすべきでない。特に思想・宗教を含めて日本文化への幅広い関心のもとに主題科目を選択してほしい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

コミュニケーション言語として地位を確立しているという意味において、英語の履修は必須である。あわせて、過去の自国の文献を読むために、くずし字と漢文の読解力を必ず習得しておいてほしい。

文芸言語学コース
英　　語　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

さまざまある人間の能力の中で、特に注目すべきものの一つは子供が大人よりも容易に言語を習得したり、使用したりする能力である。それを人間の生物学的特性として科学的に捉えようとする言語学者のグループがある。近年の英語学は、その人間の特性を英語という言語を通して解明しようとしており、認知科学の一分野として位置づけられている。当研究室の特色もそこにある。

2）教育の方針

教育方針の中心は、高度に専門的な学術論文を正確に理解し、新たな発見を可能にする英語力の養成にある。英語の読み・書きはもちろんのこと、文字に頼らずに耳で聴くだけで専門知識を得て、口頭で伝える能力も求められる。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

科学性を追求する英語学も欧米の文化に根ざしたものであるから、欧米の文学、歴史、哲学などにも広く興味を持ち、積極的に取り組んでほしい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

英語の他に、ドイツ語、フランス語、スペイン語のうちから一つを履修するのが望ましい。しかし、それに限ることなく広く言語というものに目を向け、特に英語は１・２年次から外国人教師の授業も履修し、英字新聞、ラジオやテレビの英語ニュース、英会話などを通して日本における日常生活の中で英語を学ぶようにしてほしい。卒業までには英検準一級または TOEIC 800 点を取るようにし、さらに上を目指す。

文芸言語学コース
英　　米　　文　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

英米文学研究室は、イギリス・アメリカ文学を対象として文献実証的に分析批評を展開している点に特色がある。分析批評とは、「分析」（analysis）の語源が教えてくれるように、織物としての文学テクストを丁寧に解きほぐすことを意味する。そこから立ち現れるのはテクストを織りなす、厚みのある文化、社会、そして歴史である。要するに文学を切口として、歴史の文脈において人間理解を試みている点が最大の特色なのである。

2）教育の方針

学部専門教育ではさまざまな文化背景を考慮しながらテクストの分析が行われる。したがって、ここでは「英語」は学習の対象というよりは、文化や社会、そして歴史を明察するための道具として位置づけられる。文学的テクストは西欧の躍動する知の世界を切り開いてくれるはずだ。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

われわれは英米文学のみを理解しようとしているのではない。したがって、どのように知識を獲得し、またどのように自分自身の知の世界を構築すべきかについては、基本的に各自がじっくりと考えてみる問題であると考える。そのような観点から受講すべき科目を設定すればよい。

しかし、人文学的知の世界にあっては、必要単位を取得したところで、それだけでは不十分である。独自に計画を立てて貪欲に良質の読書をすることが望まれる。

英米文学教室は、知の領域において、未来に向かって自己を開こうとする学生を待っている。

文芸言語学コース
ドイツ語ドイツ文学

１．分野・専門の特色

１）研究の特色

主に 18 世紀から現代に至るまでのドイツ語圏における文学、思想、言語、文化を対象として文献、図版、音声、映像等の資料に基づいて理解し考察を深めることを目的としている。作品にはその時代の様々な歴史的、思想的、科学技術的背景が描かれている。作品をより深く理解するためには、バランスの取れた語感を養うこと、そして資料のジャンルを問わず参照して、解釈者自身の枠組みを広げることが必要であり、文献を読むスキルを涵養することが第一歩となる。

２）教育の方針

知っていると思っていたことも時代に縛られていることがある。知識に裏打ちされた偏見のなさ、こだわりのなさが解釈の可能性を広げてくれる。作品を読み込み理解することが解釈者自身の思考の枠組みを広げることにつながり、それによって解釈の幅はいっそう広がる。その愉しみを味わってほしい。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

外国語（言語文化科目）、特にドイツ語の学修に精一杯取り組んでほしい。さらに、現代の私たちの人間像がどのような歴史的経緯の中で育まれてきたかを知ることが、未来へのまなざしを養ってくれる。歴史を知ればＥＵの中でのドイツ語圏について考えることにもなり、日本に生きる私たち自身について考えることにもなる。そのように、自らの視野を広げるような科目を積極的に履修してほしい。

文芸言語学コース
フランス語フランス文学

１．分野・専門の特色　（第一研究室）

１）第一研究室の特色

フランス文学第一研究室は、専門の異なる４人の教員（３名の教授と１名の准教授）が一致協力して、中世から今日に至るフランス語圏の文学・言語・思想および文化を対象とした教育・研究を行っている。視野の狭い単なる「専門家」の養成を目指すのではなく、人間性を多面的に探求し、日本との比較をも念頭に置いて、フランス語圏の言語文化の理解を深めることを重視する。

2）教育の方針

学部専門教育では、フランス語学の基礎的知識の習得と、文学・思想・言語文化に関する幅広い教養を身につけ、パスカルをはじめとするフランス的モラリスト（人間性の観察者）の伝統に通じる批評精神の涵養を目標としている。

2．分野・専門における学修　（第一研究室）

1）履修が望ましい全学教育科目など

履修が望ましい科目として、フランス語があることはいうまでもないが、さらに西洋の言語文化一般（文学・哲学・言語・歴史・芸術等）に関心をもち、関連する科目を履修することが望ましい。

1．分野・専門の特色（第二研究室）

1）研究の特色

中世から現代に至るまでのフランス文学の各ジャンルの作品，フランス語学，フランスの社会問題，文化全般，宗教，思想や哲学を研究対象とする。草稿研究等のテクスト批評と文学と美術評論の関わりの研究も当研究室の特色の一つである。

2）教育の方針

フランス及びフランス語圏の各時代の小説，詩，戯曲，随筆，評論等のテクストを原文で正確に読解するための語学力の習得を第一目標とし，会話や作文練習によるフランス語コミュニケーション力の向上も重視する。様々なテーマ設定の下，文学，映画，美術，音楽などの教材を用いてフランスとヨーロッパの文化の知識と理解を深める。少人数での徹底的な指導を特色とする。

2．分野・専門における学修（第二研究室）

1）履修が望ましい全学教育科目など

フランス語を履修することが望ましいのは言うまでもない。ラテン語の履修も推奨される。フランス及び関連する文化圏の言語，文化，歴史に関心をもち，幅広い知識を習得することが求められる。

文芸言語学コース

中　国　語　中　国　文　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

中国語中国文学では、中国の古代から現代までの言語学と文学を学ぶことができる。高校までで学んできた漢文訓読法も、古典文献を読み解くツールとして有用であるが、現代中国語も古典及び近現代の文献を読み解くために必要である。語学力を基礎として、自分が対象とするテキストを分析的に読めるようになることを最終目標としている。

2）教育の方針

少人数の研究室のため、演習科目の充実に重きをおいている。リテラボには、必要な辞書や資料が豊富に揃っており、また大学院生の TA が調査方法を指導してくれる。夏に 4 年生の、秋に 3 年生の卒論構想発表会を行う。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

読解のために言語の素養を磨いて欲しい。各自の研究したい方向に合わせて、文学テキスト分析の方法、言語学の理論、中国・日本ひいてはアジア全体の歴史や文化について幅広く履修するよう心がけて欲しい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

中国語はもちろんのこと、研究内容によっては、英語文献を読む必要もでてくるため、英語の学習もきちんとして欲しい。

哲学倫理学コース
哲　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

「知を愛すること」を原義とする哲学（philosophia）は、紀元前６世紀以来、この世界でより善く生きることを目指す人間が、世界と自己を知ろうとして携わってきた探求の営みであり、またそれが体系化された学問である。哲学研究室は、古代ギリシアから現代に至る西洋哲学の長い歴史の中で取り上げられた重要な問題、また現代欧米哲学、近代日本哲学において扱われる諸問題を中心に据えて、研究と教育を行っている。

2）教育の方針

学部専門教育の目的は、過去の豊かな思想の息づく原典の厳密な読解を通して、柔軟な思考力を養うことにある。演習などは少人数で受けることができ、じっくりと納得がいくまで質問したり、討論したりすることができるが、しかしまたそれゆえに、勤勉に予習してくることが強く求められる。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

文献読解のためには、西洋言語の知識が必要不可欠であることはいうまでもないが、それだけでなく、哲学に幅広い関心を持ち、倫理学や論理学など、関連する科目をできるだけ多く履修することが望ましい。

2）とくに外国語(言語文化）の履修

原典読解において用いられる言語は、ギリシア語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語であり、具体的にどの哲学者の思想を扱うかによって重要性は異なってくるが、ともかく、１年次においては英語、ドイツ語、フランス語のうち、いずれか二つを履修し、さらにギリシア語、ラテン語からは４単位が学部の選択必修科目であるので、ゆとりある３・４年次を迎えるためにも、２年次にギリシア語またはラテン語の「初級」(文学部での開講科目)を修得しておくようにしてほしい。

哲学倫理学コース
西　洋　古　典　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

欧米では一般的に「古典」（the Classics）とは、古代ギリシア語とラテン語の優れた作家の作品をさして言う。古典文学のジャンルは、叙事詩、抒情詩、悲劇・喜劇、歴史、小説、伝記な

ど多種多様である。そうした多彩な文芸創造の意義を、神話、文明の変容、死生観、ジェンダー論、英雄論、レトリック、物語論など現代に生きる我々の問題とも通じる観点から掘り下げていく。

2）教育の方針

まず翻訳でよいから、ギリシア・ローマ時代の作品に親しむこと。次に興味のある作品を原典でしっかり読むこと。その次に、作品の何が本当に面白いかを納得いくまで確かめ、自分の文章にしてゆくことが求められる。各自の関心と熱意に応じて手助けする努力を本研究室は惜しまない。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

ラテン語の有名な格言に、「私は人間である。人間に関することで、私とは無縁なものは何もないと思う」というのがある(ラテン語初歩の授業を受ければ、７月にはこれを原語で言えるはずだ)。 私たちも人間に関する幅広い関心を持つことが大切である。しかし当面の目標を考慮するなら、西洋の文学・哲学・歴史に関する科目を重視すること。またギリシア神話の本(例えばブルフィンチ作「ギリシア・ローマ神話」）に親しんでおけば専門の学習に役立つ。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

１年次に英語、フランス語、ドイツ語のうち２外国語をしっかり学び、２年次には　さらに、ギリシア語かラテン語いずれかの初歩を必ず履修すること。（３年次から原典講読の授業がある。）

哲学倫理学コース

中　国　哲　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

学生の皆さんが普段読み書きしている日本語は漢字かな交じり文で、かなは漢字の扁と旁を分解したり変形させて出来ている。言うまでもなく漢字は古代に中国から伝えられたものであり、日本文化のルーツは中国に他ならない。その中国の文化を最も深く考えてゆく学問が中国哲学である。孔子の言行録『論語』を読んだことがあるだろう。孔子の教えは、のちに儒学へと発展して行った。孔子の生きた時代が春秋時代、続いて戦国時代となり、諸子百家と総称される様々な思想家が活躍した。漢の時代には儒学経典の解釈学が盛んになり、唐の時代に大成した。この解釈学を「訓詁学」と呼ぶ。宋になると、人間の本性や天地の道理を追求する全く新しい儒学が誕生した。これが明まで続き「性理学」と呼ぶ。清には古典籍を詳しく研究する「考証学」が盛んになった。これらのいずれもが中国哲学の研究対象になる。一方、中国固有の宗教である道教、インドから伝来して独自の発展を遂げた中国仏教もスケールの大きな研究対象である。日本で高度に発達した「日本漢学」も重要な研究対象であり、更にアジアの漢字文化圏全般の学術思想文化までを研究対象とする。

2）教育の方針

漢文の本格的な読み方を身につけることを第一の目標にする。同時に読解した内容を正確に理解し、中国哲学史上にどう位置づけるかを考察する。学生時代に「学ぶ」努力を継続することが、将来の活動への大きな糧となろう。知識を教えると同時に、人を「育てる」ことをモットーとする研究室である。読解力の到達度に応じてきめ細かく対応してゆくので、初歩でも安心して勉強できる。また、結果が全てというのではなく個々人の努力を評価する。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

初歩でよいから、中国語を履修しておくと、読解のための基礎力になる。間口を広げ欧米の哲学、東洋の思想と宗教、歴史、文学に関わる科目を履修することが大切である。

２）とくに外国語（言語文化）の履修

中国語に加え英語を、余力があれば仏語・独語いずれかを履修することが望ましい。

３）その他

中国哲学研究室は創設当初より、やや少人数の傾向があるとはいえ、大変アット・ホームな居心地の良い研究室である。学習中、分からないことがあれば教員も上級生も丁寧に指導する。博物館探訪、中国料理の実習なども行っている。

哲学倫理学コース

イ　ン　ド　哲　学

１．分野・専門の特色

１）研究の特色

インドを中心として、ネパール・チベット・スリランカ等の諸地域に広がる南アジアの思想哲学・宗教(仏教を含む)・文学・美術などの文化一般を研究対象とする。文献を用いる研究が中心だが、現地でのフィールド・ワークに基づく研究も増えつつある。未知のことが多く、今後最も発展する分野の一つになるだろう。

２）教育の方針

サンスクリット語文献の読解が主になるが、これは古代・中世のインド文化を正確に理解するためにも、また現代の地域研究の発展のためにも大事な作業である。楽しみながら学んでいきたい。同時に東洋と西洋の違い、インド文化の日本に与えた影響なども、常に考慮していきたい。インドを理解するのが最終目的ではなく、インドを通して我々日本人、さらには人間を理解する事を目指したい。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

１・２年次では、若干の科目を除いて特に専門分野の科目を学ぶ必要はない。むしろ西洋の哲学・論理学や社会学、言語学、心理学、文化人類学、宗教学、美術史などに関心をもてば、将来の研究に厚みが出るだろう。

２）とくに外国語(言語文化)の履修

第二外国語としてはドイツ語・フランス語が有用であろうが、特に英語について、読み、書き、話すバランスのとれた能力を養ってほしい。

３）その他

インド文化に親しむために、インドの映画や美術展に行ったり、インド料理を味わっておくこともよいだろう。

◇◆◇　歴史文化系学位プログラム　◇◆◇

歴史学・人類学コース
日　本　史　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

本研究室では、古文書・古記録や出土文字資料を中心とする文献史料を読み解くことや、歴史的営為の痕跡の残る地域を調査することを通じて、日本列島内外に住んできた人々の生活と彼らがつくり上げてきた社会の歴史を明らかにすることを目指している。学生は古代から近現代に至るいずれの時代についても、自らの問題関心を深めながら主体的に学ぶことができる。

2）教育の方針

日本史の学修においては、文献史料を丁寧に解読し、史実を確かなものとして理解することが何よりも大切である。各時代についての史料演習や講義を通じて、不断に努力を重ねて、歴史を探求していくための基礎的知識と史料の読解力を養うことが望まれる。そのことにより、自らの歴史に対する問題意識をみがくことができ、その成果を卒業論文という形に結実させていくことが望まれる。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

過去の歴史は人間活動のあらゆる分野から成り立っているものであるから、いかなる学問であれ、熱心に取り組み、自らの視野を広げていく努力をしてほしい。とりわけ高校での学習とは違って、大学での授業では主体的な関わりが期待されており、与えられた課題をこなすのみでなく、自らも新しい疑問や課題を発見して、それに積極的に取り組んでいくことを望む。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

英語を含む２外国語を履修することが望ましい。近年では外国における日本研究の進展はめざましいものがあり、そうした成果を学んでいくことも必要となっているので、外国語の学修も決しておろそかにしないこと。

歴史学・人類学コース
東　洋　史　学

1．分野・専門の特色

1）研究室の特色

東洋史学は、日本を除くアジア全域の政治、経済、社会、文化など、人間にかかわるあらゆる領域の歴史を対象としている。研究室では主として中国史と東南アジア史、南アジア史の研究・教育を行っている。

2）教育の方針

学部専門教育では、独創的で実証的な卒業論文の作成のため、研究上の基礎的知識や文献史料読解力を修得することに力を入れている。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

アジアについて幅広い関心をもつとともに、非アジア地域の歴史学にも関心をもち、関連する基礎科目、教養科目をも履修するよう心がけることが望ましい。

２）とくに外国語(言語文化)の履修

中国史を研究しようとする者は、中国語の履修が必須であるが、２年次以降、追加的に履修することも認められる。中国史以外では、研究分野において必要と考えられる外国語の履修や学習が望ましい。

歴史学・人類学コース
西　洋　史　学

１．分野・専門の特色

１）研究の特色

西洋史学は過去に生きた人びとの姿とその営みを追い求める歴史学の一分野であり、その研究の対象は時代的にも地理的にもきわめて広範囲に及んでいる。西洋史学研究室では、とりわけ古代ギリシア、中世ヨーロッパ、近代アメリカ、近現代ドイツなどを中心に研究・教育を行っている。

２）教育の方針

西洋史学の基礎は、ヨーロッパの諸言語で書かれた史料と研究文献の厳密な読解と的確な分析、それに豊かな発想である。そのため、授業では文献を読んで理解する訓練ばかりではなく、新鮮な好奇心を育み、史料の操作を通じてそれを独創的な研究にまで高めていく思考力の養成を重視している。

２．分野・専門における学修

１）履修が望ましい全学教育科目など

外国語（欧語）の能力が必要不可欠であることは当然であるが、思考の幅を広げるためにも、西洋の文学、思想、音楽、美術などに関心をもち、それらに関する教養を積極的に身につけてほしい。また、東洋や日本の歴史に関する科目も履修するよう心がけることが望ましい。

２）とくに外国語(言語文化)の履修

履修を義務づけられている二つの外国語に加えて、古典語のギリシア語とラテン語についても、専門科目の履修のためにその「初歩」を修得しておくことが望ましい。あらゆる機会を利用して、英語の運用能力向上に努力してほしい。

歴史学・人類学コース
美　学　美　術　史　学

１．分野・専門の特色

１）研究の特色

日本・東洋・西洋の絵画や彫刻を中心にした美術史の研究を行っている。ある時代のある社会で作られた作品から、そのイメージを取り巻く人間の文化や営みをできる限り読み解いてゆくことが課題とされる。作品を実際に見て調査するフィールドワークと、関連する文献を読むこと

が基本となる。特に日本と東アジアの美術とヨーロッパのキリスト教美術の研究に力を注いでいる。

2）教育の方針

講義においては、広い視野に立った概観、および個別のテーマを取り上げて、作品の細部をいかに全体的な問題との関連の中で読み解くかに意を注いでいる。ほぼ毎時間スライドを使用して、視覚的な理解を深めるようにしている。講読においては、近年の優れた欧文の研究書・論文および美術史料を読み、文献読解の基礎力を養っている。演習においては、学生がそれぞれ関心をもっているテーマについて研究発表と討論を行う。実習では、古美術研修旅行や展覧会見学を行い、また作品の調査法を学ぶ。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

全学共通教育科目のうち、専門分野にこだわらず、各自の関心に合わせて、幅広く履修することが望ましい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

英語、フランス語、ドイツ語、中国語のうち、各自の関心に合わせて（例えば、フランス美術に関心のある者はフランス語、中国美術に関心のある者は中国語、など）２加国語、およびできれば第３外国語の初歩を履修することが望ましい。

3）その他

定められた単位を修得することにより、美術館・博物館の学芸員の資格を得ることができる。できる限り多くの美術館や寺院などに見学に行ったり、画集などを見たりして、美術作品に親しむことがよい。

歴史学・人類学コース

考　　古　　学

1．分野・専門の特色

1）研究室の特色

考古学は遺跡・遺物の実証的研究に基づいて社会や文化を解明し、人類史の再構成をめざす学問である。空間的には日本列島にとどまらず、世界各地を対象としており、時間的には原始・古代に限定されず、近世・近代にまでおよんでいる。

本研究室では、日本考古学を中心に研究と教育をおこなっている。伝統的な考古学の研究方法はもちろんのこと、自然科学的な研究方法も積極的にとりいれている。

2）教育の方針

遺跡を発掘し、出土した遺物を分析して考古学的事実を正確に把握するとともに、それらを深く掘りさげて新しい歴史像を再構築する能力を身につけさせることを目標としている。

本研究室では、講義・演習・購読・実習といった授業の中で実習をもっとも重視している。考古学の学問的独自性は発掘調査であり、それによって一次資料を獲得し、遺物整理と調査報告書作成を通して一次資料を学術資料化する。そのための技術を実習で習得する。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

日本史や地理学、文化人類学など関連のある授業科目にくわえて、東洋史や西洋史などを履修

することが望ましい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

各自の関心にあわせて履修することが望ましい。たとえば、中南米考古学に関心がある場合はスペイン語を、中国考古学に関心がある場合は中国語を履修することが望ましい。

3）その他

定められた単位を修得することにより、博物館学芸員の資格を得ることができる。授業外の遺物整理作業などに労をいとわない勤勉さがもとめられる。また、発掘調査の現地説明会や博物館見学に自主的にでかけることが望まれる。

歴史学・人類学コース

文　化　人　類　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

文化人類学は、世界の多様な社会と文化、思想をフィールドワークと民族誌、資史料にもとづいて精緻に理解するとともに、人類史的な比較の視点から、人間の本質の解明をめざす学問である。その対象となる領域は幅広く、地域的には世界のあらゆる地域を、時代的には過去から現在に至るあらゆる時代におよぶが、当研究室ではとくに熱帯アフリカと東南アジア、そして日本の文化と思想に関する研究に力を入れている。研究テーマも、衣食住、結婚と家族・親族、社会構造、お祭りや地域の伝統文化、宗教と神話、芸能、コミュニケーションなどから、私たちが直面している社会問題や環境問題に至るまで、多岐にわたっている。

2）教育の方針

フィールドワーク実習、演習、文献講読など、少人数による体験型授業を中心とし、フィールドワークおよび、一次資料の収集と分析に関する基礎的能力を習得するとともに、文化人類学の諸理論を批判的に学べるように配慮している。他者や異文化に対する敬意と感受性、コミュニケーション能力、現代社会の諸問題に対する洞察力と批判的思考力、それらの諸問題に柔軟に対峙する実践力の涵養に努めている。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

異文化や他者はもちろん、身近な地域文化や現代社会に対する幅広い関心を持つようにしてほしい。フィールドワークにおいても、哲学や文学の素養はじつは重要であるし、政治経済や法などについても知見を深めておいて損はない。生物学や物理学から文化人類学に転じた研究者もおり、自分が興味を持つ分野については文理の区別にこだわらなくてもよい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

英語の文献を読解する能力は必要である。第二外国語については、フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語、スペイン語などの中から任意に選択すればよいが、外国語を学ぶことは異文化理解の第一歩であるので、楽しみながら取り組んでほしい。

3）その他

日ごろからお祭りや文化遺産（有形・無形）に関心を払い、関連する記事に目をとおしたり、実地に見学したりしておくとよいだろう。また、留学生と積極的にコミュニケーションを取ることは、身近な異文化理解への第一歩である。

◇◆◇　環境行動学系学位プログラム　◇◆◇

環境行動学コース
社　　会　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

社会学は、人々のあいだの「関係」に着目して社会現象や社会問題を解明しようとする学問である。その研究領域は、家族、教育、産業、労働、地域、福祉、環境、災害、政治、経済、宗教、科学技術、メディアなど多岐にわたる。

2）教育の方針

演習や講義を通じて、基礎理論を批判的に学ぶとともに、調査実習や卒業研究を通じて社会の現実に迫る技法を体得することが求められている。

社会学では卒業研究を特に重視している。卒業論文は研究なしには書けない。勉強が既知の事柄学習であるのに対して、研究とは未知の事柄を自ら発見することである。

学生諸君は、講義や演習の課題とは別に、一日も早く自分の研究を始めてほしい。自分の研究を始めた人は、講義の聴き方も変わってくるはずである。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

現代社会の諸問題に対し幅広い関心をもち、社会学だけでなく政治・経済・歴史など社会科学に関連する科目を履修することが望ましい。また、社会学の概説書や古典を読んで研究方法に親しんでおくとよい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

社会学を専攻するには英語論文を読みこなす語学力が必須である。理論的研究をめざす場合はドイツ語やフランス語にも習熟することが望ましい。そのほか、研究テーマや比較対象国に応じて外国語を履修するとよい。

環境行動学コース
心　　理　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

科学的な方法論に基づく実験心理学の教育と研究を展開している。

教員の現在の研究領域は、テーマとしては知覚・認知・学習・感情・意思決定・自他認知・社会性など、手法としては行動・生理・神経科学・計算論モデルなどであり、学内・学外の関連研究室との緊密な連携のもとに研究が進められている。

2）教育の方針

授業は、講義に加え、文献講読や実験・データの分析など、演習が多くを占める。これらの授業と卒業研究については、データの収集（実験・調査）とその解析のため授業時間以外にも多くの時間と労力を必要とする。また４年次には卒業研究に集中できるよう、必要単位の多くを３

年次までに取得することが望ましい。

卒業研究のテーマは各自で選択できるが、実験や調査など科学的方法により収集したデータに基づく実証的研究でなければならない。

実験心理学の研究には、人間への幅広い関心と積極的な行動力、そして他者への配慮・協調性が求められる。志望者は研究室を自発的に訪ね、実情を把握してほしい。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

英語の学術論文を読みこなすことが関連研究の動向を知る上で不可欠であるため、英語を含む二つの外国語を履修することが望ましい。

また、研究を進めるにあたり科学的方法論および統計学の基礎知識が必要なため、それらに関連した授業は、必修でなくとも可能な限り受講してほしい。

2）専門科目の履修

２年次進級時に研究室において履修に関するガイダンスをおこなう。２ 年生のみを対象とする必修の授業や、履修に関する制約などがあるため注意が必要である。

選択科目のいくつかを他学部で受講して単位を取得することができる。

環境行動学コース

地　　理　　学

1．分野・専門の特色

1）研究の特色

地理学は、人間と環境に関わる問題を、空間・場所という視点のもとに研究する学問である。研究対象は広く、自然・人文・社会の各分野にまたがり、国内・国外を広くカバーしている。

2）教育の方針

学部専門授業では、基礎的知識に関する学習と、地域をとらえるための多面的な理解力の養成を目標としている。授業は講義・演習・講読・実習に分けられ、演習・講読では文献を用いてさまざまな地理学研究の課題・方法について学ぶとともに、卒業論文の作成に向けての指導を受ける。実習では、地理学に関するさまざまな手法を学ぶとともに、野外における調査・研究方法を体得する。

2．分野・専門における学修

1）履修が望ましい全学教育科目など

地域・社会について幅広い関心をもち、関連する科目を履修するよう心がけることが望ましい。

2）とくに外国語(言語文化)の履修

英文の文献を多く読むことになるので、英語の力を十分に身につけること。第 2 外国語は、どの言語でも良いので、海外で使用することを念頭に置いて積極的に取り組んでほしい。

3）その他

４泊５日の日程で行われる地理学野外実習に２回以上参加する必要がある。

Ⅳ　円滑な大学生活に役立つ情報を得る

1.　掲示板・ホームページを必ず確認する

高校までと違って、必要な情報は自分で得る必要がある。連絡事項は、文学部掲示板（講義棟１階廊下）、文系総合館１階ビズリーチ・キャンパス名大の掲示板及び教養教育院掲示板に掲示するか、ホームページに掲載される。連絡事項を見落とすと、重大な不利益を生ずることもあるので、掲示板・ホームページを必ず確認すること。

文系教務課ホームページＵＲＬ　https://mado.adm.nagoya-u.ac.jp/

人文学研究科/文学部ホームページＵＲＬ　http://www.hum.nagoya-u.ac.jp/

2.　指導教員に相談する

第１年次には、全体を４クラスに分けて、それぞれ１名が指導教員としてクラスを担当し、学修計画をはじめ学生生活全般にわたる相談に応じる。

今年度の各クラスの指導教員は次のとおりである。

２０２０年４月１日現在

クラス	指導教員氏名	職　名	分野・専門など	研究室番号
1	梶原　義実	准教授	考古学	文学部棟 ２２７／２階
2	杉村　泰	教授	日本語教育学	全学教育棟北棟 ３１０／３階
3	加藤高志	准教授	言語学	国際開発棟 ３０２／３階
4	ミギー・ディラン	准教授	日本文化学	文系総合館 ６１６／６階

なお、第２年次以後は分野・専門に分属することになるので、それぞれその分野・専門の教員が指導教員となり、卒業研究指導や進路相談に応じる。

3. 文系教務課と連絡を取る

文系総合館１階ビズリーチ・キャンパス名大に文系教務課事務室がある。事務受付時間帯は、

８時３０分　～　１７時　である。

・授業期間外の事務受付時間帯は、１０時～１２時、１３時～16 時である。

第１年次生の教務・厚生関係の業務は、原則として**教養教育院事務室**（全学教育棟１階）で取り扱うが、次の業務については**文系教務課**で扱う。

① 学生証の発行（再発行を含む）に関すること

② 留学・休学・退学に関すること

③ 転学部に関すること

④ 学生教育研究災害傷害保険に関すること

⑤ 外国人留学生の諸手続き

⑥ 研究室分属の決定に関すること（第Ⅱ期）

文学部専門科目の履修登録・成績に関することは文系教務課が担当する。

4. 学生支援センターを訪れる

本学には学生支援センターがあり、個別相談に応じているので気軽に訪ねるとよい。

ホームページＵＲＬ　http://gakuso.provost.nagoya-u.ac.jp/

E-mail　soudan@gakuso.provost.nagoya-u.ac.jp

TEL　052-789-5805

また、ハラスメント相談センターでも、個別相談に応じる体制がとられている。